

《書 評》

今井銀四郎編

「脊髄損傷ハンドブック」

川崎医科大学リハビリテーション科

明 石 謙

「脊髄損傷ハンドブック」という書名を見た時の感想は「ハンドブックにしては小さい本だな」という程度である。しかし、内容を読み進むにつれて、「便利な本だな」というようなものになってしまっていて、今でもその感じを持ち続けている。

この本の特徴は、主な項目が解剖、発生と疫学、症状、治療、リハビリテーション、心理、看護、社会復帰、社会保障となっており、1つの脊髄損傷の教科書とも思えるのだが、それぞれの中の小項目は独立しており、どちらかというと百科辞典

風である事に気付く。したがって、初めの章を読んでいなければ後の方は全く理解できないというものでも無く、必要な項目を目次や索引で探しその項を読めばよいという事になる。しかし、その説明は百科辞典のように大体の事を説明するに止どまってはいいない。例えば導尿法は多くの頁を用い、写真、図ともに念入りで实际的である。また、看護の項も手引書のように、実施要領のような書き方であり、あくまで实际的である。このような所のみを紹介すれば脊髄損傷マニュアルのように思われ

る方もいるかも知れないが、数多くの症例統計も用い、新しい知見も盛り込まれ、堂々としたハンドブックの内容ももちろんそなえている。

この本が便利だと思ったのは次の3点による。

- ①初心者には詳しい知識を得る事が可能である。
- ②ある程度以上の知識や経験の持主は、自分の専門以外の知識を知るのに便利である。
- ③医師、PT、OT、看護婦、学生、等、だれでも読む事ができるようになっている。

なお、巻末に各種の医療器具の広告がまとめて掲載されているが、これもこの書をさらに実用的にしている。

(A5版、464頁、定価4,800円、技報堂出版)